

日蓮大聖人御書全集

みよういちあまごぜんごしようそく

妙一尼御前御消息

ふゆ

かなら

はる

こと

（冬は必ず春となるの事）

みよういちあまごぜんごしようにそく

ふゆ

かなら

はる

こと

妙一尼御前御消息（冬は必ず春となるの事）

けんじがんねん

がつ

さい

みよういちあま

建治元年（'75）

5月

54歳

妙一尼

みよういちあまごぜん

妙一尼御前

にちれん

日蓮

そ

てん

つき

ひ

そうもく

しょう

ひと

夫れ、天に月なく日なくば、草木いかでか生ずべき。人

ふぼ

ひとり

欠

しそくとう

育

うえ

に父母あり。一人もかけば、子息等そだちがたし。その上、

かこ

しょうりよう

びようし

おなご

過去の聖霊は、あるいは病子あり、あるいは女子あり。

留

置

はは

誰

言

預

とどめおく母もかいがいしからず。たれにいいあずけてか

めいど

赴

たま

冥途におもむき給いけん。

だいかくせそん

ごねはん

とき

歎

宣

われねはん

大覺世尊、御涅槃の時、なげいてのたまわく「我涅槃す

こころ

あじやせおう

かしようどうじぼさつ

べし。ただ心にかかることは阿闍世王のみ」。迦葉童子菩薩、

ほとけ

もう

ほとけ

びようどう

じひ

いつさいしゅじよう

仏に申さく「仏は平等の慈悲なり。一切衆生のために

命

お

たも

搔

分

あじやせおうひとり

いのちを惜しみ給うべし。いかにかきわけて阿闍世王一人

仰

と

ごへんじ

とおおせあるやらん」と問いまいらせしかば、その御返事に

のため

たと

ひとり

しちしあ

しちし

なか

いっし

云わく「譬えば、一人にして七子有り。この七子の中に一子

やまい

あ

ふぼ

こころびようどう

病に遇えり。父母の心平等ならざるにはあらざれども、

びようし

こころすなわ

おお

とう

しかも病子において心則ちひとえに多きがごとし」等

うんぬん

てんだい

まかしかん

きようもん

しやく

い

たと

云々。天台、摩訶止観にこの經文を釈して云わく「譬え

しちし ふ ぼ びようごう

ば、七子の父母平等ならざるにはあらざれども、しかも

びようしや

こころすなわ

おも

とううんぬん

病者において心則ちひとえに重きがごとし』等云々とこ

ほとけ こた

たま

もん

こころ

ひと

数

多

こ

そ仏は答えさせ給いしか。文の心は、人にはあまたの子

ふ ぼ

こころ

やまい

こ

あれども、父母の心は病する子にありとなり。

ほとけ おん

いっさいしゆじよう

みな

こ

うち

つみ

仏の御ためには一切衆生は皆、子なり。その中、罪ふ

せけん

ふ ぼ

ぶつきよう

敵

もの

かくして、世間の父母をころし、仏経のかたきとなる者は、

びようし

病子のごとし。

あじやせおう

まかだいこく

しゆ

わ

だいだんな

しかるに、阿闍世王は摩竭提国の主なり。我が大檀那た

びんばしやらおう

わ

敵

てん

捨

りし頻婆舍羅王をころし、我がてきとなりしかば、天もすて

にちがつ　へん出

ち　いただ

震

ばんみん

ぶつぼう

て日月に變いで、地も頂かじとふるい、万民みな仏法に

背

たこく

まかつこく

責

あくにん

そむき、他国より摩竭国をせむ。これらはひとえに悪人・

だいばだった　し

けつく

きよう

あくそうみ

い

提婆達多を師とせるゆえなり。結句は、今日より悪瘡身に出

さんがつ

なのか

むけんじごく

お

悲

でて、三月の七日、無間地獄に墮つべし。これがかなしけ

われねはん

こころ

掛

われ

あじやせおう

れば、我涅槃せんこと心にかかるといふなり。我、阿闍世王

救

いっさい

ざいにん

あじやせおう

歎

たま

をすくいなば、一切の罪人、阿闍世王のごとしとなげかせ給

いき。

しょうりよう

びようし

おなご

しかるに、聖靈は、あるいは病子あり、あるいは女子あ

捨

めいど

枯

く

き

り。われすてて冥途にゆきなば、かれたる朽ち木のような

年 寄 あま ひとり 留

るとしより尼が一人とどまりて、この子どもをいかに心

苦 歎

ぐるしかるらんなげかれぬらんとおぼゆ。

こころ

にちれん

こころ

掛

かの心のかたがたには、また日蓮がこと心にかからせ

たま

ふつこ 虚

ほけきよう 広

たま

給いけん。「仏語むなしからざれば、法華経ひろまらせ給う

ごぼう

べし。それについては、この御房はいかなることもありて、

たま

思

言

いみじくならせ給うべし」とおぼしつらんに、いうかいな

流 う

ほけきよう

じゅうらせつ

くながし失せしかば、「いかにや、いかにや。法華経・十羅刹

思

永

たま

は」とこそおもわれけんに、いままでだにもながらえ給い

にちれん

許

そうら

とき

よろこ

たま

たりしかば、日蓮がゆりて候いし時、いかに悦ばせ給わ

言

虚

だいもうこく

寄

ん。また、いいしことむなしからずして、大蒙古国もよせ

こくど

危

そうら

よろこ

たま

て国土もあやおしげになりて候えば、いかに悦び給わん。

ぼんぷ

こころ

これは凡夫の心なり。

ほけきよう

しん

ひと

ふゆ

ふゆ

かなら

はる

法華経を信ずる人は冬のごとし。冬は必ず春となる。い

むかし

聞

見

ふゆ

あき

返

まだ昔よりきかずみず、冬の秋とかえられることを。いまだ

聞

ほけきよう

しん

ひと

ぼんぷ

きようもん

きかず、法華経を信ずる人の凡夫となることを。経文には

ほう

き

ひと

じようぶつ

「もし法を聞くことあらば、一りとして成仏せざることな

説

そうろう

けん」ととかれて候。

こししょうりよう

ほけきよう

いのち

捨

故聖靈は法華経に命をすてておわしき。わずかの

しんみよう

支

ほけきよう

召

いのち

身命をささえしところを法華經のゆえにめされしは、命

捨

か

せつせんだうじ

はんげ

み

捨

をすつるにあらずや。彼の雪山童子の半偈のために身をす

やくおうぼさつ

ひじ

焼

たま

かれ

しようにん

ひ

みず

て、薬王菩薩の臂をやき給いしは、彼は聖人なり、火に水

い

ぼんぷ

かみ

ひ

い

を入るるがごとし。これは凡夫なり、紙を火に入るるがご

とし。

あん

しようりよう

くどく

だいげつりん

これをもつて案ずるに、聖霊はこの功德あり。大月輪の

なか

だいにちりん

なか

てんきよう

さいし

み

う

中か、大日輪の中か、天鏡をもつて妻子の身を浮かべて

じゅうにとき

ご

覧

さいし

ぼんぷ

十二時に御らんあるらん。たとい、妻子は凡夫なれば、こ

見

聞

たと

みみ

癡

もの

いかずち

こえ

聞

れをみずきかず。譬えば、耳しいたる者の雷の声をきか

ず、目つぶれたる者の日輪を見ざるがごとし。御疑いある

べからず。定めて御まぼりとならせ給うらん。その上、さ

こそ御わたりあるらめ。

力あらばといまいらせんとおもうところに、衣を一つ

給ぶじよう、存外の次第なり。法華経はいみじき御経にて

おわすれば、もし今生にいきある身ともなり候いなば、尼

ごぜんの生きてもおわしませ、もしは草のかげにても御

らんあれ、おさなききんだち等をばかえりみたてまつるべ

し。

佐 渡 ぐに もう

もう げにんひとり付

そうろう

さどの国と申し、これと申し、下人一人つけられて候は、

よ 忘 そうろう

おん

仕

いつの世にかわすれ候べき。この恩は、かえりてつかえ

そうろう

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

たてまつり候べし。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

きようきようきんげん

恐々謹言。

ごがつ にち

五月 日

にちれん

かおう

日蓮 花押

みよういちあまごぜん

妙一尼御前